

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1272401173		
法人名	株式会社デジジョンケア		
事業所名	グループホームぬくもりの家君塚		
所在地	千葉県市原市君塚3-22-1		
自己評価作成日	平成30年9月13日	評価結果市町村受理日	平成31年2月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/12/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人ヒューマン・ネットワーク		
所在地	千葉県船橋市丸山2-10-15		
訪問調査日	平成30年10月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

介護度が低い方から高い入居者を介護する状況で、怪我なく安全な暮らしを提供出来る様に、事故防止委員会を中心に事故、インシデント、ヒヤリ・ハット報告をまとめてカンファレンスを行い、事例の対応の検討や再確認を行っている。また、介護計画に沿ったケアが出来ているかを開会した職員がチェックをして共有すべき情報は記録に残してチームケアを心掛けている。個別対応に関しては、それぞれの入居者の状態を考えて、目標を設定して取り組んでいる。その他にも入居者のレベルに合ったぬり絵や計算など、時間があればすぐに対応出来る様に準備をして提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1) 介護計画の実施状況チェック欄が温度版に記載され、職員は常にケアプランを意識して介護にあたるように工夫している。2) 実施状況や評価から入居者ひとり一人の「今月の目標」を居室担当者中心に決め職員で共有し、個別の自立ケアに活かす取り組みを始めている。3) スライドを使いホームの取り組みの実績を見ていただくなど運営推進会議を活かす取り組みが継続されている。4) 事故防止委員会よりの事故・インシデント・ヒヤリハット報告を事故防止につなげ、幅広い介護度の入居者ひとり一人が安全で安心して暮らせるケアに努めている。5) 理念「笑顔とぬくもりのある家」を目指しチームワークよくケアに当たっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	デジジョングループ経営理念と職員で考えたグループホーム運営理念を毎月の各ユニット会議の終わりに全員で唱和して、職員が念頭に置いて仕事に取り組むように努力している。	皆で作った「笑顔とぬくもりのある地域に根差した『家』を目指す」との理念を掲示するとともに毎月のユニット会議で確認共有している。理念実践に向け個人の目標を決め、レベルに合わせ笑顔で自信をもってできるよう個別対応に力を入れて取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の盆踊りやお祭りに参加している。年6回グループホーム通信を作成して入居者の近況報告を載せて町会と小学校に届けている。町会では回覧で見ている。	ホームの行事や入居者の様子を掲載したグループホーム通信を年6回町会と小学校に届けている。地域の盆踊りに全員が参加、秋祭りにお神輿を見に行ったり、小学校の運動会に招かれたりしている。大正琴や手踊りなど地域のボランティアに来ていただいている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で入居者の対応事例を紹介し、認知症の理解を深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族や町会、市役所、地域包括支援センターの方々に出席頂き、入居者の状況や生活の様子、外部評価の報告、対応事例の紹介をして意見交換を行っている。	スライドショーで普段の入居者の生活状況を見ていただき、また、避難訓練を見ていただくなど、サービスの実際を知っていただき、出席者から多くの意見が出され活発な意見交換が行われている。会議を活かした取り組みをしていることは議事録から読み取れる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に出席頂き、意見を伺っている。現在、成年後見人制度が必要となった入居者について地域包括支援センターに相談をして、市役所に依頼し手続きを進めている。	市担当者とは法人の総務を通して緊密な連携が取れている。地域包括支援センターの方には毎回運営推進会議に出席頂いている、また議事録を届け市へも現状報告している。成年後見人の件に関してなど丁寧に対応していただいた。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月行っているユニット会議の中での話し合いで職員の理解や認識を高めている。特に言葉による抑制に関しての注意は促している。	言葉による拘束、「ダメ」はダメ、入居者の行動には必ず何かしらの意味があり、そのことを理解しながら声掛けを工夫するなど、毎月のユニット会議で、虐待防止委員が中心となって、身体拘束ゼロの意識向上を図り実践している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止委員を置いて防止に努めている。問題があればすぐに対応が出来る体制になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今回、成年後見制度が必要となった入居者の手続きをする為、地域包括支援センターに相談をして知識が深まった。職員にもユニット会議で話をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は重要事項説明書を読み、不明な点は質問を頂いている。変更事項が生じた場合は書面にて連絡をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族参加の行事の後に運営推進会議を行い意見や要望を聞く機会を設けている。担当のケアマネは、常に連絡を取り必要があれば会議で意見を検討している。	運営推進会議に多くの家族が参加している。また、ぬくもり会・敬老会・クリスマス会や避難訓練に参加いただくなど、家族が参加する機会を多く作っている。家族も共に支えるという意識醸成とともに、気軽に意見や要望を言ってもらえる機会ともし、具体的な意見や要望が多く出され運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のユニット会議でそれぞれ行い話し合いを行っている。職員とは毎年業務管理シートを提出時に面談を行って意見も聞いている。改善提案の白カードがあるが、今はほとんど利用されていないので今後活用していきたい。	毎月のユニット会議で、業務に関する話し合いを行っている。日課の見直しと清掃職員配置と個別対応への取り組みを今年の業務改善事例発表会で報告した。職員は各委員会に所属して意見や提案を積極的に行っている。また、管理者は業務管理シート提出時に職員と面談し、意見を聞いている。改善提案の白カード制度など職員の意見を反映させる仕組みが整っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人員不足は現在解消されてはいるが、今後定年退職者が続く為、対応をお願いしている。意見や要望は伝えることが出来る環境にある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の資格更新や業務に必要な研修は必ず受けている。法人内のDVD研修、リーダー職員育成研修に参加、その他法人外の研修の機会は増やしていきたい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	会社内のグループホームとは、合同会議を開催して問題点などを検討をしている。同業者との交流の機会が持てればよいと思っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の思いや要望を聞き出すことが困難であることが多い。事前の情報収集や行動の観察、本人の言葉を良く聞き取り、情報を職員で共有し安心して生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時または入居後に家族から要望及び入居にあたっての不安な点を聞き、その点を踏まえたサービス計画の作成をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時にアセスメントを取り、必要なサービスを見極めて計画書の作成をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	毎月のユニット会議でケアカンファレンスを行い本人の思いと言う観点でも話している。本人が出来る仕事は職員と一緒にいき感謝の言葉を掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には面会や行事への参加をお願いし、共に支える事を確認して、一緒に過ごす時間を作っている。また、可能であれば外出、外泊をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親類や知人の方の面会があり、気楽に來られる雰囲気づくりを心掛けている。馴染みの理美容室を、4名の方が利用している。	遠方から親類の方や知人が訪ねてくる。4名の方が家族と一緒に馴染の理美容院を続けて利用している。家族と毎週のように外泊したり、お墓参りや散歩、外食やなじみのスーパーへの買い物、中にはよく行ったスーパー銭湯に行く方もいる。電話の取次ぎや手紙のやり取りのお手伝いなど、家族の方の協力も得ながら、馴染みの関係を継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	午前中はリビングで過ごすことが多く、入居者同士で会話されている方もいる。体操やゲーム、カラオケなど職員を交えて楽しむ時間を作り、関わり合いが持てる様に支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居者が入院時、経済面で問題があり退去となった際には、その後の状態を把握し、空室状況等家族に情報提供を行った。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望や意向は出来るだけ実現出来る様に努力している。本人から聴くことが難しい場合は、言葉や行動などを観察して本人の気持ちを理解するように努めている。	入居前に利用していた施設や自宅にケアマネジャーが訪問し、利用者とは話をしながら、基本動作や生活の様子などを把握し、把握が難しい利用者には家族から話を伺っている。入居後には、居室担当を中心に入浴、排泄、食事やコミュニケーション力などのアセスメントを改めて実施し、本人の発した言葉や感じたことを客観的にアセスメント表に記入しケアプラン作成に反映させている。職員は利用者の横に座り、ゆっくりした雰囲気の中で利用者の思いや希望を聞き取ることに力を入れて取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に生活歴や生活環境等の情報を、本人や家族または入居前の担当ケアマネ、施設担当者から収集して、職員全体で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの状態を観察して、新たな情報や変化を見逃さず記録に残し、職員全体で共有できるように努めている。それぞれの能力や趣味に合った個別対応が出来る様に取り組んでいる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員全員が記入できるアセスメント表とケアプラン評価表の書式を用いている。ユニット会議でのケアカンファレンスでも意見を出し合い検討して介護計画を作成している。	ケアプランのサービス内容の実施状況チェック欄が温度版に記載され、職員は常にケアプランを意識して介護にあたるように工夫している。介護に関わった職員がその都度、ケアプランに即した内容を介護記録に記入することによりケアプランの見直しにつなげている。実施状況や評価から居室担当者が特に力を入れて取り組みたいサービス内容については、利用者個々の「今月の目標(個別対応)」を設定し、事務所に掲示して申し送り時にも唱和するなど、職員の共有と意識付けにつながる新たな取り組みがみられる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録の書き方について、会議で何回も確認をしながら職員間で情報の共有が出来るようにしている。また、介護計画の実践チェック表を活用し、見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況に変化があった場合は話し合いを持ち、ニーズに対応できるように努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事に参加したり、施設内のイベントでは、ボランティアによる踊りや歌などを楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族希望のかかりつけ医となっており、3名は元々のかかりつけ医で他は協力病院をかかりつけ医としている。1ヶ月に1回の訪問診療を受けており、希望者は訪問歯科の受診もしている。	ほとんどの利用者が協力医療機関の訪問診療を受けている。また、これまでのかかりつけ医への受診時には家族が同行している。訪問診療前には、受診時の特記事項や薬の処方などをFAXで事前に送付し、スムーズな受診が行えるように配慮している。訪問診療時には、看護師が立会い、不穏時の対応や薬の注意点などの医師からの指示事項を訪問診療記録に記載し、連絡ノートや申し送り時に職員への情報共有を図っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常勤のパートである為、不在時は連絡ノートや看護師専用の携帯電話で相談し指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は状態を把握するために家族との連絡を取っている。場合に応じては看護師が病院の担当看護師と直接連絡を取り、状態の確認を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	急変時の対応は家族から入居時に確認を摂って方針を共有している。ターミナルケアは行わない方針で、必要時は早い段階で家族との話し合いをしている。	契約時に「重度化対応指針」により、重度化した際のホームの基本的姿勢や医療連携について利用者、家族に説明している。同時に延命治療や救急搬送の医療機関の確認などの「重度化支援に関する意向確認書」や「急変時及び重度化対応についての同意」により利用者、家族の意向を確認している。重度化した入居者が疼痛や苦痛がなく本人、家族が望むような人生の過ごし方ができ、ホームでの継続ができるように最大限の努力をすることも伝えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	以前施設内研修で看護師から提供があった資料を事務所に置いて、いつでも確認出来る様にしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルの火災、地震、風水害編を揃えている。年2回の避難訓練を家族や地域の方に見学して頂き、推進会議で意見を聞いている。年1回の夜間召集訓練も行っている。	運営推進会議の開催に合わせた日中、夜間の火災を想定した避難訓練には、ほとんどの利用者と職員が参加し、家族や地域住民が見学に訪れている。2名の夜勤者だけの夜間想定訓練や予告なしの職員の夜間召集訓練を行うなど、実践的な訓練を実施し災害に備えている。火災、地震、風水害の昼間、夜間ごとのマニュアルには、職員の役割分担や避難経路、緊急連絡網、ハザードマップが記載され、緊急時に活用しやすい内容となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	運営方針の中に尊敬の念を持って接すると掲げ、言葉使いや声掛けの仕方には十分に注意するように心掛けている。	新聞を読んだり、得意な筆ペンでの書道や縫い物、中庭での野菜作りなど、これまでの生活習慣や趣味を尊重した個別目標を毎月掲げ、職員は対応に努めている。その結果、利用者からの「ありがとう」などの言葉につながっている。トイレや浴室、居室では、声かけと見守りにより、転倒防止に注意を払いながら羞恥心やプライバシーに配慮している。また、利用者や家族の希望により同性介助も行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	意思疎通が少し困難な場合は、本人の行動言葉を聞き取り、出来る限り行動を制限したり無理強いをしないように気を付けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	意思表示が出来る方は、自室でテレビを見たり、ラジオを聴いたり、自発的に趣味活動を行ったりと希望にそって過ごして頂いている。午後からは職員が昼寝を促し、休む方もいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月に1度、介護出張美容に来てもらい髪をカットして頂いている。自分で服を選んでいる方もいるが、着やすく楽な服を着て頂くようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人の能力に合わせて、時々味噌汁の具を刻んでもらい、お茶や味噌汁は、好みの温かさで提供している。また、ほぼ毎日トレーやお椀拭きを手伝ってもらっている。	食堂にはBGMが流れ、利用者一人ひとりのペースでゆっくり食事を楽しんでいる。利用者の力に応じ、下膳や食器拭きなどの手伝いが行われている。おせち料理、節分の恵方巻き、ひな祭りのちらし寿司など季節を感じる行事食を家族と一緒に味わい、刺身料理などのお楽しみメニューも毎月提供されている。天気の良い日は中庭で、厨房で調理した弁当の食事会を職員と一緒に楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	中間記録用紙を使用して、一日の食事量や水分量が把握できる様にしている。少ない場合は工夫をして提供し、摂取量が確保出来る様に努力している。3名がブレンダーミキサー食、6名が刻み食を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の能力に応じて、見守りや声掛けや介助にて、口腔ケアを毎食後行っている。義歯を使用している方は、夕食後に預かり洗浄剤で清潔にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	安全と清潔面を考慮して3名が夜間ポータブルトイレを使用している。排泄チェック表を用いて、排泄パターンを把握し、汚染がないように声掛けや誘導をして、清潔保持に努めている。	ユニット毎に車イス対応の5か所のトイレが配置され、混雑せずにいつでも利用できるようになっている。便器には背もたれや手すりが設置され、転倒やふらつきなどの事故防止を図っている。立位、座位が可能な限り、トイレでの排泄にこだわり、排泄表を活用し、タイミングを見計らい羞恥心に配慮しながらトイレへの誘導を行っている。失敗の回数が少なくなり、ほとんどの利用者がトイレでの排泄が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄表にて把握をして、看護師に相談しながら下剤の調節をしたり、牛乳等の水分摂取を促している。また、体操などで体を動かすように支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は毎日行っているが、3日に1回の目安となっている。時間は午後となっているが、その中での順番は希望があれば対応している。	「入浴管理表」を活用して、利用者の希望に合わせ、週2～3回の入浴を行っている。入浴を嫌がる利用者には入浴日の変更や声かけ職員の交代などの工夫を図り、体調や血圧の変化のある際は、入浴の中止や清拭で対応している。三方向介助の浴槽や滑り止めマット、浴槽台などの補助用品が用意され、利用者が安心して安全に入浴できるように配慮している。また、浴室と脱衣所の温度差を無くし、ヒートショック対策にも注意を払っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中休息が必要な方には声掛けをして居室に誘導をしている。夜間に湯たんぽを希望される方がいて対応をしている。照明も個々の希望にそって気遣いをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬は間違えのないように、二重のチェックをして防止に努めている。薬の変更があった場合は薬名、作用や副作用を確認し、バイタルや様子を観察して変化に注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者が出来る手伝いを日課として、洗濯物の片付けや掃除などを行っている。また、それぞれの個別対応に職員が目標を立て、取り組みを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	初詣、お花見、ドライブと外出が出来る行事を計画し出掛けている。中庭では花の水やりや日向ぼっこをしたり、食事会も行っている。家族の協力を得て外出、外泊へ行く方もいる。	車いすの利用者が多くなり、散歩の回数が少なくなっているが、中庭での外気浴や花壇での季節の花や野菜栽培で戸外の空気を味わえるように支援している。初詣や近隣の公園での花見、地域の盆踊り大会などに外出し、季節感や地域住民との交流を図っている。また、道の駅、農業センターなど地域住民の集まる場所へのドライブ外出も行っている。買い物や墓参り、散歩など家族と一緒にの外出も行われている。	筋力低下を防ぎ五感を刺激し気分転換を図るためにも、職員配置や一日のスケジュールを工夫し、日常的な外出支援の取り組みが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理をしている方はいないが職員と買い物に行った時に、レジで支払いをしてもらう事もある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の対応が出来る方は、家族からの電話を取り次ぐ事がある。また、家族や知り合いと手紙やハガキのやり取りをしている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関や中庭には、季節の草花を飾ったり植えたりしている。中庭は、リビングや廊下から眺めることが出来て、綺麗に咲いた花を觀賞する事もある。リビングや居室の温度管理、冬は加湿器を使用して湿度の管理をしている。	明るい陽射しが差し込む高い天井のリビング・食堂には、仲の良い利用者同士のテーブル席やいつでも休息できるソファが設置され、職員と利用者とのにぎやかな会話があふれている。リビングではカラオケや新聞、チラシを読む人など自由に時間を過ごしている。趣味を活かして作成した紙人形や利用者や職員の共同作成の切り絵などがリビングに飾られている。また、廊下には節分、クリスマス会、誕生会などの行事写真が掲示され季節感を感じさせる。天気の良い日は、広い中庭のベンチでの会話や体操、レクリエーションを楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには、自席以外に座れる長椅子がありテレビやDVDを見たり職員と話をしたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	若い頃の家族写真やお孫さんの写真、趣味で作成した工作を飾ったり、テレビやラジオを持って来られ居室で楽しんでいる方もいる。	入居時には、家族の協力により、これまで使い慣れた鏡台、家具や思い出の家族写真、アルバムを持ち込んでもらっている。居室内の転倒防止のために動線に配慮し、掴まりやすい位置に椅子を置いたり、センサーマット、ナースコールなどの設置による安全対策も図っている。毎日、掃除担当職員が居室を掃除し清潔を保ち、夜勤者による居室内の温度、空調管理にも配慮している。また、衣替え時期には家族の協力を得て、居室担当職員がクローゼットの整理を行い、季節に応じた更衣支援を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の部屋が分かるように目印を付けたら、夜間のみポータブルトイレを使用して、安全に排泄ができる様にしている。また、床にセンサーマットを使用して転倒を防いでいる方が4名いる。		